

教 仏 庵 草

第204号
(発行日)

2007年6月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 真宗共学会 --- 毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

* 8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

法 然 の 死 生 観

法然聖人が流罪の後、京都に帰ることが許されてからの最晩年に、次のような言葉が伝えられている。

「世路のいとなみは往生の資量とあてがい、妻子眷属を知識同行とたのみて、よわいの日々にかたぶくおぼ、往生のようやくちかづくぞとよろこび、命の夜々におとらうるおぼ、穢土のようやくとおざかると心ろえ、命のおわらん時を生死のおわりとあてがい、かたちをすてん時を苦悩のおわりと期し」

これは浄土に生まれることが決定した人のありたき姿を述べられたものであるが、現代の私たちの考えと照らし合わせてみると、深く教えられるものがある。

まず「世路のいとなみは往生の資量とあてがい」とある。いわゆる生計とか収入を得るとか金儲けは何のためにするのかという問題である。それはこの世をただ生き延びるた

めでもなければ、快適な生活や娯楽を楽しむためではない。それらは浄土に生まれていく生活の、物質的な糧なのである。浄土に生まれていく日々を送るための手段であるといわれる。金儲けが人生の目的なんぞでは全くないと。

また「妻子眷属を知識同行とたのみて」というのは、いわゆる家族とは自分にとってどういう人かという問題である。家族は、血縁のあるものの同居人でもなければ、単に愛情をかけあうもの同士の仲間でもない。

それは愛情関係で結ばれつつ、浄土に生まれていく同行すなわち法の友であり、また仏法の真実に導く知識すなわち師でもあるといわれるのである。深い縁あつて夫婦となり親子となつて共に生き、同じ浄土への旅の（友なり師なり）である。

また「よわいの日々にかたぶくおぼ、往生のようやくち

かづくぞとよろこび」とある。これは月日がたち歳をとつていくことを私たちはどう受けとっているかという問題である。現代人は月日がたち、歳をとることをいやがり、嘆きながら仕方がないと思わない。しかしここでは、年月がたち日々が過ぎていき、歳をとることは、清らかで安らかな浄土へ生まれる時がだんだん近づいてくることにほかならず、むしろよろこばしいことだといわれるのである。

また「命の夜々におとらうるおぼ、穢土のようやくとおざかると心ろえ」といわれている。一日一日身体が老化し、衰えていくこと、この悲しみややるせなさを感じているのが私たち現代人で、「これしかたがない」と思いながら生きていく。それに対してここでは、身体が日々に衰えていくことは、苦しみの世、欲望が根になつていく汚濁の世から、遠ざかつていくことになるのだと仰せられている。

また「命のおわらん時を生死のおわりとあてがい、かたちをすてん時を苦悩のおわりと期し」と仰せられている。

これはこの世の命がおわること、いわば死ぬことをどう受けとるかという問題である。私たちの考えの本にはいつも「死んだら困る」という思念がある。死なないようにすることが政治経済の基本的な目的であり、科学なかんづく医学の目的は人が死なないようにすることである。健康で長生きをすることが最高価値であり、死ぬことは敗北であり、最大不幸であるというのが現代人の常識になつている。それゆえいつも「死んだら困る」という思いで生きていく。

ところがここでは死ぬことは、長いあいだ迷つてきた迷いの生がいよいよ最終的に結することであり、それゆえ一切の苦悩が尽きることであるとされている。なぜか。念仏をいただいている人は、この世において死ぬことは浄土というさとり領域に至ることである。迷いが終わり、苦しみが消滅して、さとり智慧が完成し、まったく安樂が成就することなのだといふ。

「生きて死ぬ」ことをこういふこととして生きることができ、そう法然聖人は教え

てくださるのである。(了)

真宗問答(二二五)

第二十二願その一

(第二十二願)

たとい我、仏をえんに、他方の仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して、究竟してかならず一生補処にいたらん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆえに、弘誓の鎧をきて、徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国にあそんで、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正真の道を立てしめんをばのぞかん。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずんば、正覚をとらじ。

(現代語訳)

わたしが仏になったとき、他の仏がたの国の菩薩たちがわたしの国に生まれてくれれば、必ず菩薩の最上の位である一生補処の位に至らせよう。それぞれの希望によって自由自在に人々を導くため、かたい決意に身を包んで、多くの功徳を積み、すべてのも

常倫——つねなみのともがら。諸地の行——菩薩が仏と成るために経過しなければならぬ十地の各段階における修行。

のを救い、さまざまに仏がたの国に行つて菩薩の行を修め、すべての仏がたを供養し、かずかぎりない人々を導いて、この上ないさとりを得させることも自由にできる。すなわち通常に超えすぐれて菩薩の徳をすべてそなえ、大いなる慈悲行を実践できる。もしそうでなければ、わたしは決してさとりを開きません。

*

○「今回は第二十願についてお聞きしましたが、今回から第二十二願についてお話し下さい」

D「二十願は阿弥陀仏が、浄土に生まれ仏果をえたものをして、衆生を救うために浄土から穢土に還つてさまざまに衆生救済の働きをせしめよう、との阿弥陀仏の願いです。それでこの二十二願をへ還相回向の願」と聖人は名づけられました。なおまたへ一生補処の願」とも云われています」

○「一生補処の願とはどういう意味ですか」
D「浄土で仏のさとりを完成し、衆生救済のために菩薩の位に降つてさまざまなかたちをとつて衆生を導き救う働きをする、そういう位をここで一生補処の位と聖人は見ておられます。一生補処という言葉葉自体は、この一生をおえる」と次に仏の位になるという意

味で、仏の位(処)を補うということを表されています。聖人の領解では、もと仏であるが観音菩薩や普賢菩薩のよりに衆生救済のためにあえて、一段下の菩薩の位にくだつて活動される、そういう位を表現したのがここです。一生補処の位とされています。そして原文の(その本願の自在の所化)以下は、そういう菩薩の衆生救済の働きを述べられていると見られています」

そういう還相の菩薩たらしめたいという願を建てられ、それを穢土にいる私たちに知らせてくださいるのです」

○「では(その本願の自在の所化)とは」

D「還相の菩薩となつて自由に衆生を教化したいという願いでもつて、という意味でありましょう」

○「(衆生のためのゆえに、弘誓の鎧をきて)とは」

D「一切衆生を助けたいという広大な堅い誓いに身を包んで、という意味でしょう」

○「(徳本を積累し、一切を度脱し、諸仏の国にあそんで、菩薩の行を修し)とは」

D「菩薩は衆生救済のために多くの徳を積み、一切の衆生を助けんがために、さまざまに国に至つて、自由に菩薩行を行う、という意味でしょう」

○「(十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して、無上正真の道を立てしめん)とは」

D「あらゆる処にまします仏の処に行つて、仏を敬い、仏の教えを聞法し、数かぎりない衆生を仏道にいらしめ、この上ないさとりにあざからしめよう、という意味でしょう」

(語句の説明)

一生補処——菩薩として最高位の位で、一生を過ぎれば仏の位(仏処)を補うべき地位の意。
來生——浄土に生まれること。

所化——教化。
弘誓の鎧——衆生救済の誓願の堅固なことをよろいたとえたもの。

度脱——救うこと。
開化——仏法に目覚めしめること。

無上正真の道——この上ないさとり。

○「へをばのぞかん」とは」

D「そういう還相の菩薩となつて活動したいという願いを起こす菩薩は浄土に生まれて仏果にとどまることから（除いて）、一生補処の菩薩として還相し、利他の活動にあらしめよう、とのお心です」

○「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」とは」

D「そういう還相の菩薩の活動は、菩薩の通常の各段階（諸地）の菩薩行を超えて、自在に活動し、かぎりない慈悲行を実践することができるといふ意味でしょう。普賢の徳というのは無量の慈悲の徳ということですよ」

○「へもししからずんば、正覚をとらじ」とは」

D「もし浄土に生まれて衆生がこのような還相の働きをなし、還相の菩薩として自由に衆生を救済する徳を成就しないようなら、法蔵菩薩は仏（正覚）には成らない、と誓われたという意味であります。ざつとですが以上のような内容が願文の意味でありましよう」

○「そういう還相の菩薩実際にはどういふ姿をとって衆生

の上に現れてくださるのですか」

D「それは『教行証文類』の証巻に

大菩薩、法身の中において、常に三昧にましまして、種種の身、種種の神通、種種の説法を現ずることを示すこと、みな本願力より起これるをもつてなり。

とあるように、種々の身といふことですから、さまざまの姿となつて、また種々の神通ですから、さまざまの勝れた智慧の働きとなり、種々の説法ですからさまざまの縁で法を衆生に説かれる。そしてそれらのできる本は阿弥陀仏の本願力によつてであるといわれていきます」

○「種々の身とは具体的には」

D「まずはさまざまの諸仏・諸菩薩でありましょう。もつと現実的には仏法を説いてくださる有縁の善知識方や同行たちといえましょう。さらに広げれば、親ともなり、妻とも夫ともなり、友人ともなり、あるいはまた敵ともなり、迫害者ともなり、あるいは人間以外の身ともなつて、私たちを真理に目覚めしめるようにさまざまに導き、仏道にいれ

てくださる方々でありましよう。ですから、私たちの方から云えば、目の前にいる人も先に浄土に生まれた方の還相

したもう菩薩かも知れませんが。還相の菩薩があなたを救わんがために親なり妻（夫）とまでなつて下さつていかつてもいいかもしれません」

○「種々の神通、種々の説法とは」

D「さまざまの勝れた智慧の働き（神通）とか、さまざまの説法といふのは、身近にはいろいろな縁での善知識方の説いてくださる仏法でありましよう。さらには、この世のさまざまの悲喜苦楽の縁、それらがお念仏に入れてくださる法縁となつてくださるとも、種々の神通・種々の説法といふだけです」

○「私たちの側から云うと、お聞かせいただくさまざまな説法は還相の菩薩方の説きたもう神通の働きであり説法であるともいだけるのですね。この世のいろいろな出来事すら、我々を浄土に生まれさせようとの働きかもしれない。それを救いたもう法の側からいふと還相の菩薩の種々の神通であり説法であるとお聞かせ下さるのですね」

D「ええそうです。さまざま

なこの世での苦楽の因縁も菩薩が私たちを目覚ませようといふ働きがこもつていふともいえる、ということについて、『維摩経』という經典に、（普現一切色身）という菩薩のことが説かれています。普現一切色身とはあらゆる形をあらわすものという意味で、この菩薩は

（人々を成熟させるためには、彼らは老人や病人となり、自ら死を現出する。あるいは大地がごとく燃え尽きる劫末の火をも現出する。こうして永久性を信じこんでいる衆生に、無常の事実を示すのである）

とか、（思いどおりに姪女ともなる。それは男どもを引き寄せるためであり、愛欲の鉤でさそつて、彼らを仏陀の知の中におく）

などとして働いてくださるとも説かれています」

○「人々を真理に目覚ましめんがために、善知識はもとより、いろいろな人ともなり、あるいは自然現象とも表れる。そういう中にも種々の神通、種々の説法の働きがこもつていふと説かれていますので

すね」

D「こういうことは凡夫が軽々と申すべきことではないでしょうが、実際に仏法に入つていく縁になるものは有縁の多くの善知識の説法でありましよう。しかしそれだけではなくて、人生のいろいろな場面でのさまざまの縁（人の死だとか人間関係のもつれだとか自然災害なども含めて）が仏縁になることを思えば、それらもまた還相の菩薩の活動の種々相と受けとることができると思ひます。そういう点から考えれば、還相の菩薩がさまざまの縁がたや形となつて、穢土に働きかけてくださつて衆生を仏道にいらしめたまうといふ教説もうなずけてまいります」

○「衆生を浄土に生まれさせ、仏となるなら、還相の菩薩としての自在な衆生救済の徳を与えたいという、広大な尊い願心が法蔵菩薩の第二十二願に示されているのですね」

D「そうですね」

（了）

罪者が罪を反省し罪の重さをすこしなりとも自覚してこそ償いという意味が出てくるが、罪を認めることもないまま、犯罪者を死にいたらしめることが罪の償いになるのかどうかも問題である。池田小学校事件の詫間被告は罪を自覚しないまま、「死んだら何もなくなる、死ぬことは怖くはない」といって死に服したという。これは罪の償いになっっているのか。

またもし生命が殺されると、それに対して償いをするのが死刑なら、一人殺したら、当然殺した犯人も死刑にならねばならない。なぜなら一人に命の償いは一人の命を差し出さねば（不公平）だから。

死刑制度は難しい問題をはらんでいる。（丁）